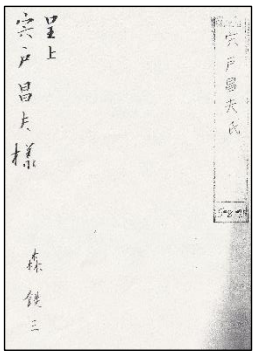
「森銑三刈谷の会」だより　No. 9

発行　2022年6月18日（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー　刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp



（左）『書物と江戸文化』1941 年 11 月発行、大東出版社カバー/（右）刈谷市中央図書館所蔵の同書見返しには森銑三自筆で「呈上　宍戸昌夫様」とある。（森銑三からの献本が、1993［平成 5］年 8 月 25 日、宍戸俊治氏次男・昌夫氏から刈谷市中央図書館へ寄贈された。）

第 9 回（2022/5/21）神谷磨利子「宍戸俊治先生と森銑三　―『書物と江戸文化』はしがきを読む―」参加 13 人

宍戸先生に導かれた村上文庫整理（神谷磨利子）

森銑三が初めて村上文庫約２万５千冊の整理の仕事に就いたのは 1916（大正 5）年 6 月 17 日のことであり、満 20 歳の時である。おびただしい数の和装本を前にして、手も付けぬ内から気持ちが萎縮したが、宍戸俊治先生の指導で少しずつ古書に対する目が開かれ、それらの整理の仕事が楽しいものになり、一年半の間に、全書物の整理を終え、分類目録を作り上げた。「過去を語る」（1954 年完稿、『森銑三著作集』12 巻 pp.387-8）や「刈谷図書館の村上文庫」（1964 年刊行、『著作集』11 巻 pp.470-480）などに刈谷図書館在職中のことは書かれているが、今回は『書物と江戸文化』（1941 年、大東出版社）の「はしがき」を読み合わせた。村上文庫の和書の山の中から最初に手にした本が『園太暦』（洞院公賢）で、戸惑っている銑三に、傍らに立ってにこにこしていた宍戸先生が「これは南北朝時代の公家の日記だ」と教えてくれたことに始まり、『無冤録述』を「法医学の本だ」と説明してくれたことなど、宍戸先生が古書の世界に導いてくれた様子が具体的に書かれている。宍戸先生からは『国書解題』『漢籍解題』『日本古刻書史』『名古屋市史学芸篇』『日本医学史』などの参考書籍、亀城尋常高等小学校からは『大日本人名辞書』を借り、整理を進めていく。

しかし「はしがき」を読んで感銘したのは、銑三が明治の刊本だけでなく、村上文庫の中から『群書一覧』（尾崎雅嘉編、江戸後期の解題書）なども参考書として活用し、一年半の整理期間の間に、江戸時代の学者やその著述について大体会得し、それが後の人物研究の端緒を開くことになったという点である。

その後、「逝かれた宍戸先生」（『亀城同窓会雑誌』1925 年、『森銑三遺珠Ⅰ』）の最終部分を読み合わせた。宍戸家の三代前の先祖・方鼎翁に宛てた秦鼎の手紙を見せてもらったこと、その秦鼎に関することを書いた葉書が先生への最後の便りになったこと、返書の代わりに先生逝去の通知を受け取って呆然としたことが述べられている。読む側も胸の詰まる思いがした。

会の後、感想を寄せていただいた。「宍戸先生の手解きにも応え、銑三さんもやり遂げられます。今回も励まされました」竹中良枝。「銑三さんはすごい！と、ひたすら感心。また昔の医者の、文化に対する深い意識と、若者を育てようとする態度や自分の財産を役立てる実行力に感動」山田宇多子。「銑三さんは宍戸俊治さんの優しさや温かさに包まれて成長されたのかなと思いました。丸に幡の字の蔵書印の野口梅居の件で、長嶌さんが枇杷島で梅居の青物問屋跡を見学したと聞き、身近に感じました」河橋育実。「前回の鷹見泉石や渡邊崋山、今回の松浦武四郎などこの地域に関係ある人々が登場し、豪華キャストですね。電子辞書を片手に聞いています」神谷明子。「興味ある話で楽しく聞かせていただいています。たくさんの人に聞いてもらわないと勿体ないと思います」神谷美恵子。「銑三さんが読んでいる本の中に、秦鼎と近藤重蔵との交渉を書いている松浦武四郎の手紙が見つかったとの箇所から、三人の関係に思いを馳せました」飯田芳子。

今後予定　（バックナンバーは図書館 HP「森銑三刈谷の会」でお読みいただけます。）

10.　2022/6/18(土)　写真と文に見る森銑三の人柄
11.　2022/7/16(土)「森銑三『愛知県三河の七夕』」を読む＋正木敦子「起こし絵」解説　□